人生は65歳からおもしろい

性の世界探究編①

今どきのラブホテル利用術

金澤 匠

若者を草食系扱いし、中高年には「死ぬまで現役！」とあおるのが昨今の風潮ではある。だが、性にまつわる考え方や実践はもっと多様なはずだ。人生をより豊かにするために、自分の「心と体」にどう向き合うか、今週から新シリーズでお届けする。

羊羹（ようかん）を先着50人にプレゼント――。

和菓子店でも新規開店するのか。無料引換券を前にそう考える人は少なくないだろう。だが、これはラブホテルのサービスなのだ。券は各部屋に備えてあり、次回訪れたときに利用できるシステムだ。

今どきの恋人たちは羊羹をつまみながら甘い愛をささやき合うのか……と首をかしげたくなるが、引換券を使うのは、もっぱら〝おじいさん〟や〝おばあさん〟である。

「お年寄りに人気の『とらや』の逸品で、いつもすぐになくなります」

長野県や山梨県などで三つのラブホテルを経営する細田悠太氏（31）がそう話す。

羊羹の無料引換券配布は、高齢者の顧客を意識したサービスである。引換券が使える期間を年金支給日直後に設けたところ、シニア世代のホテル利用者数が増加したという。

シニア向けのサービスは、それだけではない。細田氏の経営するホテルでは、利用者へのプレゼントとして全国各地の銘菓を取り寄せ、無料提供している。豆菓子の詰め合わせなどは、お年寄りに特に喜ばれているという。

食事にも気を配っている。ルームサービスで注文できるメニューに「おかゆセット」や「長芋グラタン」などを加えた。これらは「歯の悪いお年寄りにも噛（か）みやすいように」と考案され、東京・銀座の一つ星レストランで修業したシェフが腕を振るう。細田氏は「舌の肥えた年配者に喜んでもらいたい」と言う。

手厚いサービスだが、細田氏が経営するラブホテルが特別なわけではない。

全国に44のラブホテルを展開するレステイ（東京都中央区）は、高齢者の利用が多い地方都市のホテルを中心に、日中の〝ご休憩〟時間を朝から夕方までの10時間程度に拡大したり、和室タイプの客室を増設したりしている。

「シニアのニーズに応じた取り組みです。50代の自分が利用者の立場になって考えました」

と、レステイの代表取締役・宮原眞氏（52）は言う。

安全面を考慮して、ホテル内の階段には手すりをつけ、テーブルは角に丸みのあるものにした。各部屋にあるエアコンやテレビのリモコンは、使い勝手のよいシンプルなタイプを用意した。ボタンがありすぎるのは不評らしい。衰えた視力をサポートするために拡大ルーペも完備。映画ソフトは洋画の場合、目に負担のかかる「字幕版」ではなく、「吹き替え版」をそろえた。高齢者に人気のカラオケでは〝懐メロ〟の曲目の拡充を図っているという。

このようにラブホテルは今、高齢者の顧客拡大を視野に、あの手この手のサービスを提供している。シニアを意識する理由は何か。

「子どもが減り、シニアが増える中、ラブホテルの売り上げに占める高齢者の割合はますます高くなると思います」

そう話すのは、ラブホテルの経営指導などを行うコンサルティング・オフィス・ヤマウチ（東京都練馬区）の代表・山内和美氏（48）だ。山内氏は「お年寄りを抜きに業界の未来は語れない、と言ってもいいのではないでしょうか」と断言する。

20～30代がラブホテルを利用する中心世代であることは変わらない。しかし、若い世代の利用者増加はさほど期待できない。前出の細田氏は「（若者は）懐に余裕がないのでしょう」と分析する一方でこう続ける。

「お年寄りは恋愛やセックスに、とても前向きです。時間とお金に余裕のある人が多く、〝性春〟を謳歌（おうか）しています」

事実、細田氏が経営するラブホテルでは平日の昼間に来店するカップルの約3割がシニア層だ。また、朝5時ごろに腕を組み、やって来る高齢カップルもいる、という。

「顔なじみのお客さんが朝摘みの野菜をくださることもあります。畑仕事やパチンコの後など、時間にゆとりのある年配者がいらっしゃるのでしょう」（細田氏）

このあたり、地方ならではのエピソードだろう。

「家族の目」と「近所の目」を回避

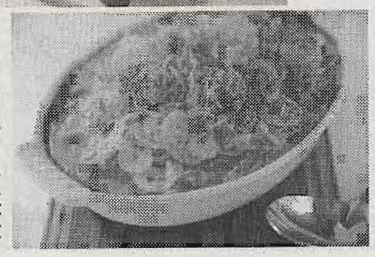
ラブホテルは「年寄りに無縁」と思っていたのだが、どうやらそれはぼくの認識不足だったらしい。取材の中で、ラブホテルを利用する高齢者が多いと思われる東京都内のエリアをいくつか教えてもらった。そのうちの一つがJR鶯谷駅前だ。

平日の昼下がり――。カップルが一組、二組、三組。学生や会社員らしき男女のほか、小さなリュックを背負った熟年カップルが、ホテル街の狭い路地を進む。着飾った若者と対照的に、シニアのペアは、落ち着いた格好で、何かしら〝散歩がてら〟といった趣がある。

手をつないだ学生風のカップルが立ち止まった。外観や料金表を笑いながら確認している。その横をすり抜けて熟年カップルがラブホテルの入り口をくぐった。男女とも60代かそれ以上に見える。

次々と熟年カップルがラブホテルに吸い込まれていく。この辺りは、風俗店も少なくないと聞く。ミニスカートに腕をとられた〝おじいさん〟はこれから性的サービスを受ける、といったところか。

また、巣鴨駅（JR・地下



ルームサービスで注文できる「ヘルシーおかゆセット」（上）と「ヘルシー長芋グラタン」（細田氏提供）

■前号まで■

自分に合った施設を選ぶ目を養う「有料老人ホーム編」、年を重ねても地域で生き生きと過ごす人々にその極意を学ぶ「生活パラダイス編」、複雑怪奇な制度を分かりやすく解説し、赤裸々な実態をリポートする「特別養護老人ホーム編」、年齢に応じたファッション術を身につけて夫婦で恋人同士に戻ってデートを楽しんだり、夏休みの孫との付き合い方を考える「ウキウキ夏計画編」をお届けした。

かなざわ・たくみ　1973年生まれ。北海道出身。日本・海外メディアの記者として、犯罪事件や企業戦略などを取材する。2010年からフリー。高齢者の生活、事件、性愛などの取材を続けている。著書に『50歳からの孤独と結婚』（PHP新書）

鉄）近くのホテルに出入りする年配者を見かけた。見たところ、2人とも60代か。買いもの帰りなのだろう。〝おじいさん〟に続き、〝おばあさん〟が入っていく。

「いずれ20～30代の中心世代に取って代わるでしょう」

前出のレステイ代表・宮原氏はそう予測する。傘下ホテル約1100室の利用者数に占める高齢者の割合は大きくなっており、その勢いは「しばらくはとどまらないだろう」と見る。

「利用者全体の20％くらいが60代以上ではないでしょうか。私たちの世代も上の世代もまだまだ元気なんだ」（笑）

若者はインターネットでホテルを探して「行ったことのないところに行こう」となるが、シニアは違う。

「お年寄りは利用するホテルは1軒、もしくは2軒と決めている。週に1度、月に1度と、なじみの店に行く。浮気をしない、レギュラーカスタマーです」（宮原氏）

ラブホテルを利用する高齢者が少なくないのは、元気で年を重ねる人が増えているのはもちろんだが、一方でホテル側が「どこで逢瀬（おうせ）を楽しむか」というシニアの悩みに応えていることがある。

子ども世代と同居していれば、「家族の目」が気になる。夫婦の営みは難しく、ましてや伴侶以外の相手を自宅に招くのは至難の業だろう。息子や娘に「相手は誰だ」と問い詰められたり、「いいトシして」とあきれられたりするかもしれない。

一人暮らしでも、「近所の目」がある。毎日のあいさつが煩わしく聞こえるかもしれない。あらぬうわさの標的にもなりうる。

人知れずに逢瀬を楽しみたいが、場所はどうしよう。そのようなとき、候補に挙がるのがラブホテルなのである。

ありがたい便利な〝愛の巣〟だが、使ったことがない人もいるだろう。「大昔に使ったきりで……」と不安を覚える向きもあるだろうか。

前出の経営コンサルタントの山内氏は言う。

「一緒にわくわくしてお部屋を選んだりする。設備の操作などわからないことを、一緒に不思議がったりする。ちょっとした冒険を楽しむくらいの姿勢のほうが、大人の余裕を感じさせるかも」

ホテルならではの〝非日常性〟をスパイスにするということだろう。とはいえ基本は押さえておきたいところ。ラブホテルのタイプはさまざまあるが、ここでは山内氏の教えにならい、「モーテル型」と「ビル型」に大別しておく。

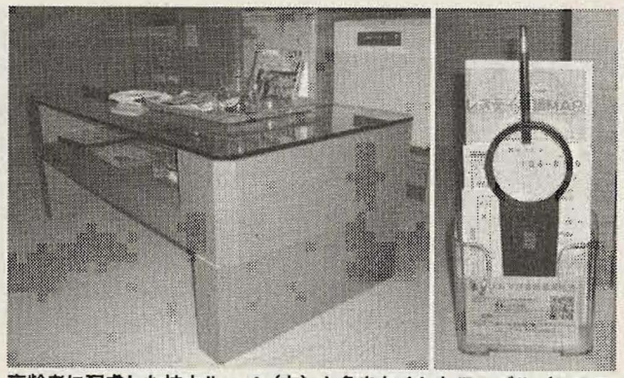
「モーテル型」は、車で入店することを念頭に置き、多くは高速道路のインターチェンジ付近や郊外の幹線道路沿いにある。部屋と駐車場（ガレージ）が一対となっており、ガレージを選ぶことにより部屋選びが完了する。多くはガレージから部屋へ直接入れる。そのため、誰ともすれ違うことなく、逢瀬を楽しめる。

各ガレージに掲示してある部屋の料金や写真のパネルを車中から見て回り、気に入った部屋のガレージに車を入れる。徒歩で利用する人もいるので、入庫の際には「入室」「空室」の表示に注意したい。

「ビル型」は主に街中や郊外に立地する。多くはフロントにパネルボードが設置してあり、各部屋の設備や料金を見比べて選ぶ。パネルボードのボタンを押すと部屋が決まる。

利用料金は「前払い制」と「後払い制」の二つがある。前払い制の多くはフロントで精算する。退室の際、飲食物など利用したサービスの追加料金を支払う。

後払い制はさらに「自動精算機」「エアシューター」「フロント」の三つの支払い方に分かれる。室内やフロントの「精算機」で「会計ボタン」を押せば、画面に料金が表示される。部屋とフロントをパイプ（管）がつなぐ「エアシューター」は、退室の際にフロントに電話で料金を聞き、告げられた金額を、パイプ内のカプセルに入れてボタンを押す。つり銭はカプセルで送り返される。「フロント」はフロント従業員に直接支払う。



高齢者に配慮した拡大ルーペ（右）と角をなくしたテーブル（レステイ提供）

「和」の雰囲気を醸し出す部屋（細田氏提供）

「性」は「生」…癒やし合う空間で

性欲は本能であるがゆえ、「老いれば枯れる」のではなく、健康ならば異性を求める気持ちは続く。それは生きがいにつながる。けだし、「性」は「生」なのだろう。

とはいえ、年を重ねた分だけ愛の営みにはおのずと変化が現れる。

「お茶を飲んで、風呂に入るだけの高齢カップルも少なくありません」

レステイ代表の宮原氏はそう明かす。コンドームやティッシュペーパーを使った形跡がなく、日中をラブホテルの一室で過ごしていることもある。

それにしても、今どきのシニアは元気がいい。

「お年寄りは、必ずしもセックスをするためだけにラブホテルを利用するのではないのです」（宮原氏）

〝愛の巣〟で何もしない――首をかしげるぼくに、経営コンサルタントの山内氏は、ラブホテルを「癒やしの空間」としてとらえるべきだ、と忠告する。

「一緒に寝ているだけで幸せ、と感じる高齢者は少なくないですよ。お年寄りは、とにかく『ゆっくりと落ち着きたい』という思いがあるのでしょう」（山内氏）

先述したように、滞在可能時間を日中いっぱいに延ばしたり、洋室よりも和室を充実させるホテルが出てきているのもその表れだろう。

「それともう一つ」と、山内氏に指摘された。

「シニアは『年寄り扱い』されることを嫌います」

プライドが傷つくらしい。だから、シニアに対するサービスをラブホテルはあからさまに「高齢者向け」とはうたっていない。冒頭で紹介した「羊羹無料券」などのサービスも、シニア限定のものではない。

「シニア割引」を設けているホテルもあるが、

「ほとんど使われていないのではないでしょうか。一定の年齢以上で使える割引サービスが好評を博していると聞いたことはありません。利用頻度の高い『学生割引』と大きく異なるのです」

と、山内氏は言う。

レステイ代表の宮原氏は笑いながらこう解説する。

「女性と一緒にいるときに、『自分は年寄りです』とは言えないですよ。自分たちの世代は、とにかく〝ええかっこしい〟なんだ」

ラブホテルの利用を過度に不安がることはないだろう。シニアの複雑な胸の内を理解したうえで、ホテル側は気配りをしている。どうぞごゆっくりと――。

●来週は同編②「手元に置きたい〝官能小説〟」です

取材協力＝レステイhttp://www.restay.com/　ホテル南の風風力３駒ヶ根（長野県駒ヶ根市赤穂458）　コンサルティング・オフィス・ヤマウチhttp://www.lh-yamauchi.com